

アピトユ

験 経 る あ

子 澄 中 田

自閉症ということばを耳にして十数年はたった。当時、京都大学教育学部の大学院生であったTさんから、I君の保育を依頼されたにはじまる。何もわからないのに若かった私は無謀にもおうけして、手さぐりのままで二年間を過ごした。今にして思えば、I君には本当に相すまないことをしたと深く反省している。先日、彼のその後が知りたくて訪ねたら東京へ転宅され、今春中学も卒業して、

就職したとの事であった。機会があれば会ってみたいが、彼がどんな反応を示すか不安でもある。

この事が縁で、自閉症を診断された子をおうけするようになった。自閉症と診断するにはどうかと思うようなO君、軽症のA君、そしてK君たちである。殊にK君との二年間は学ぶことが多かった。彼は卒園生の紹介で入園したが、初対面で大いに驚かされた。彼の行動はいうなれば動物的であり、手あたり次第に口に入れ、嗅ぎ、そして叫び、高い所へ飛び上がり、父母の存在さえ無視の状態であった。声となるのはコマーシャルのひとりごと、叫びだけである。正直なところ困惑した。私の力の及ぶ範囲にあらざると判断し、まわりの子どもへの影響も考えて、きっぱりとお断りを決意した。口まで

出かけた時、父母の目に涙をみた。結果は心とは反対におうけすることとなったのである。

四月は他の子どもへの影響も考慮して休んでいたが、五月から通園をはじめた。母親は当時出産直後であったため、はじめから付添人なくおうけした。予想外の激しい奇行の日々に、私は途中、何度かダウンしたが、彼は私におかまひなく通園して来た。彼の忠実な僕わがとなって私は観察をつづけた。集団生活である以上、できるだけお友たちの仲間入りをと誘いかけるきっかけをみつけ出す、手さぐりの毎日であった。六月なかばごろ、ようよう靴をぬぎ、靴箱へも始末ができるようになった。やれば何とかなる手がかりを得た事は感激であった。

その後七月中旬のプール開きまで

は、基本的な生活習慣を身につけることや、彼の好きな音であそぶなどをくり返した。六月末にはピアノのリズムにあわせてグルグルまわり、両手をひろげて笑いころげ、快の表情もあつた。トランポリン上でも共にはねたりもしたが、プールでの水あそびは、彼にとっては何よりもまさる、長つづきのするあそびであつた、文字どおりの天衣無縫の姿で、お迎えがみえても、帰ろうとはせず、自分の世界に浸っていた。

二学期にはマンツーマンから組への仲間入りを試みた。絵画制作、体育あそび、リズムあそびの類はその内容や、方法により彼の興味にあわせて、三歳児、四歳児のお友だちと一緒にあそびさせた、案じていたがまわりの子どもたちはK君の世話を進んでし、話しかけてもきた。このこ

ろから私は文楽の人形づかいよろしく、黒子となって行動への誘導をした。ハプニングはついてまわったが、彼の心がわかるにしたがい、私の心もようよう落着きを得た。母親におんぶされた事のなかつた彼が、私におんぶを求めしぐさをし、抱っこをせがみ、母親を驚かせた。

そして人間らしい心の表情をあらわせなかつた彼にも、ようようそのきざしがみえはじめたのである。私は無性にうれしかった、だがことばだけは交わらなかつたのである。ことばをかわしたい。コマージュを言うところに着眼して、彼特有のコマージュを使ってかわつてみた。たとえば「ハヤシもあるでしょう」と彼が言えば、即座に机をたたく「机もあるでしょう」といった具合である。これは意外に効果がみられた

ので、二年目の二学期ごろから、どんどん試してみた。三学期には「K君これ何？」と問えば「えーといすと対応するところまでになった。生活発表会のリズム合奏にも参加した。そして今春小学校の特別学級へ入学した。

入学式には私も参列した。喜々として校庭を走りまわっていた彼も、式では落着かず、とうとう立ちかけたところを制止された。その後は反抗をつづけ、記念写真撮影の時には父母の前でひっぱたかれた。「学校は幼稚園みたいに甘やかされへんので」のことばを頭上にあびて。悲しい入学式であつた。

先ほど、参観して来たら、彼は失語症の先輩の世話の許で学校生活をしていた。お早うといつても挨拶もしないで無表情のままです。

(京都光明幼稚園)